

原 著

英文学における自然観の変遷 － Wendell Berryの自然詩にみられる神 －

西村 杏子*

＜要 旨＞

人間と自然の共存の長い歴史において、過去100年ほどの短い時間に人間が自然をひどく破壊してしまったことを深刻な問題ととらえる自然詩人たちは、人間を自然界の頂点におくという、旧約聖書に基づいた人間至上主義を否定する。彼らは人間は自然の一部に過ぎないとし、人間よりも動物や植物や鉱物の中に人間を超える崇高なものを見出す。その中で、ケンタッキーの山間で実際に農業を営みながら詩を書いていたWendell Berryの作品の中には“Sabbath,” “Creation,” “Eden,” “mystery”など聖書に出てくる言葉が頻繁に使われている。宗教と言語の間には深い関係があるというベリーは、これらの言葉の宗教上の意味を否定することなく、さらに別の意味を付加して使っているように思われる。彼が自然のサイクルの中に見出す秘蹟や自然界に遍在する神性を表現する言葉としてである。

キーワード：安息日 エコエコノミー 農民詩人 人間中心主義 インヒューマニズム

I. はじめに

イギリスのロマン派詩人William Wordsworthにその源を見ることが出来る自然詩の流れはある時点でアメリカ詩人たちにも引き継がれて、現在まで途切れることなく続いている。18世紀の農業および産業革命を待つまでもなく、それ以前からイギリスの全国土にわたり自然資源は濫用されて壊滅の危機に瀕していた。新大陸アメリカでも事情はそう変わることはなかった。広大な大陸に白人たちが入植すると、ただちに道路や鉄道が敷設され、鉱山・牧畜用地・水脈など、天然資源は無尽蔵のものという誤解のもとに開発・搾取された。一方、“フロンティア”の開発も盛んとなり、アメリカ全土に手付かずの自然が皆無に近くなるのにそう時間はかからなかった。そのような状況を目の当たりにして、自然詩人たちは自らの作品の中で自然の美しさを詠い、それらを破壊する人間の不遜に同胞の目を向けさせようとしたのである。

時代の推移や地域の相違の中で自然詩の訴えるものは変わることなく受け継がれている。ワーズワス、ハーディ、ロレンス、ソロー、ジェファーズ、そして1930年代に生まれたアメリカの自然詩人たち、スナイダー、オリヴァー、ベリーらの作品に共通する点を要約すると次のようになる。Nature vs. culture（自然対人間の文明）という命題に直面したとき、迷わず自然を優先さ

せる。それは西欧文明の根底に流れているキリスト教の考え方に内在する人間至上主義あるいは人間中心主義に異議を唱えることである。人間至上主義とは、旧約聖書創世記第一章二十六節に、「海の魚、空の鳥、家畜、それに地を這うすべての生き物を治めさせるために、神は人を自らと同じ形に創造された」とあるように、人間はこの世の創造物の最上位にあるものだと考えることである。自然作家たちは動物、植物、鉱物、気象現象、山川などの地形といった自然界のものに人間を超える崇高なものを見出す。

このほかの共通点は上記の大きな特徴から派生するものである。このように自然を敬愛することから、自然詩人たちは自分の住む土地・場所を大切にする。逆にいえば愛すべき土地を見出すことができた幸運な詩人たちが自然詩を書くようになったとも言えるかもしれない。ワーズワスはイギリス湖水地方を愛してそこに住み着いた。湖水地方の湖は物資の運搬手段として使われ周囲の自然は当時すでに相当荒らされていたという。またロビンソン ジェファーズはアメリカはカリフォルニア州のモンテレーの海岸に住み、その美しい土地に人間が侵入してきて自然が破壊されていく状況をその詩作品の中に書いている。ゲーリー スナイダーは、カリフォルニア州東部のシエラネヴァダの山地でかつて採金のために荒廃した自然を見ている。それぞれの詩人はその在住した土地との関係で論じられ

* 西南女学院大学人文学部 人文学科 教授

ることが多い。そして彼らは自然保護を「提唱」するよりは、破壊された自然を修復することを「実践」する。ベリーもケンタッキーの農場で牧草地や林の養生を試みていることをその詩の中に描いている。

戦争は人間ばかりでなく自然をほとんど回復不可能なほどに壊滅するということに気づき反戦の詩を書くことも自然詩人たちがすることである。たとえば、ロビンソン ジェファーズ¹⁾の“Battle”(戦争)をみてみよう。

..... It would be better for men
To be few and live apart, where none could infest
another; then slowly the sanity of field and
mountain
And the cold ocean and glittering stars might enter
their minds.

(人間はもっと数少なく、そして離れて住んだほうがいいだろう。お互い邪魔しあうことなく。そうすればゆっくり、野や山の正気が、冷たい海や輝く星が彼らの心の中に入っていくことができる。)

ジェファーズは「誰もがやがて戦争が起こるだろうとわかっていた。戦争の次は無力感・飢餓・絶望そして疫病のような狂気がくる」といい、しかし、人間は戦争で死に、数を減らし過疎な状態になったほうがいい。そうすれば文明は廃れ、野や山や海や星が健全な精神を蘇らせてくれるだろうといっている。

さて、この小論でとりあげる詩人 Wendell Berry の詩の中には“Sabbath,” “Creation,” “Maker,” “Garden,” “Resurrection” などキリスト教の世界で使われる宗教用語が多く使用されている。ベリーは後述のように宗教と言語の間に深い関係があることをみとめ、自身の詩の中に使われている言語、すなわち英語とその言語文化の根底を支えてきたキリスト教の間には切っても切れない関係があるとしている。他の自然詩人たちと同様に人間が自然に対しておこなってきた暴虐を糾弾する詩作をしているベリーの詩の中にあらわれるそれら聖書用語はどのような意味をもつものであろうか。少なくとも教会や国家など組織化されたものと関連をもつ言葉として用いられているのではないことは確かである。農業者であり、詩人であり、教師でもあるベリーの数多くある詩集の中から *Farming: A Hand Book* と *A Timbered Choir* の2冊を中心に詩の分析をおこな

いながら、作品の中にあらわれる神について考察していく。

II. ウェンデル ベリーについて

1. 農民詩人ベリー

ウェンデル ベリーは1934年ケンタッキー州ニューキャッスルに生まれた。大学で英文学を学び、ジョージタウン大学やニューヨーク大学で教鞭をとった。後にケンタッキー大学に招かれたとき、代々受けつがれ彼が5代目にあたるヘンリー郡の農場に戻ってきた。最初は休暇のときのための別荘のつもりだったが、1965年に住居を改築してからはそこに定住することになった。ということは農場を経営し始めたのであった。農場の仕事は家畜の世話から牧場の柵の修繕、牧草刈りなど本格的なものである。他のアメリカの自然作家の多くと同様ベリーはこれほど無計画に搾取されてきた自然をもとの豊かなものに戻すことに努力し、それを楽しもうとする。人間と土地の間柄を昔の、人間が機械に頼らずに、文字通り自力で土地に働きかける方法で取り持つという手法である。土地を耕すのに化石燃料を燃やして動かすトラクターなどは使用せず、馬に鋤を引かせる方法をベリーはとる。(南米ペルーのウルバンバの谷で私が実際に見た、また中国雲南地方の棚田で家畜の力を借りて土を耕す、いかにものどかで牧歌的な風景を思い出すが、実際はその労働は大変なものであろう。)

ベリーを紹介する文章のまず冒頭に目にするのは farmer という文字である。まず農民であり、次に詩人なのである。インターネット上の Angela Strunk²⁾ による紹介文には “The farmer, poet, novelist, essayist, and teacher” という順で書かれている。ベリーは自分が住むケンタッキー州ヘンリー郡ポートロイヤル (Port Royal) (作品中では Port William となっている) を舞台として農民を主人公とした長編小説を数編、そしてエッセイ集も多数出している。1986年に初版が出され、1996年に「あとがき」を加えて第3版が出されているエッセイ集 *The Unsettling of America*³⁾ の第1章 “The Unsettling of America” の結びの個所でベリーは次のように述べている。

And perhaps most important of all, it proposes as agriculture based upon intensive work, local energies, care, and long-living communities, that is, to state the matter from a consumers' point of view; a

dependable, long-term food supply.

ここでは農業の分野に限って議論を進めているが、広大な農地に単一の作物を機械を使って生産する効率優先の商業主義的な現代アメリカの大規模農業は自然(=土)を搾取し、国土を疲弊させるものであるとしている。このやり方を続ければ自然が本来もっている再生産能力を失わせることになる。ペリーは警告している。複数の種類の作物を輪作の方法で育てる小規模集約農業を提唱するペリーは、消費者の立場からいえば、食料の継続的な供給が保証されなければならないということであるといっている。そしてこれはエコエコノミー⁴⁾の提唱者たちがいい、ここ10年来世界が目向け真剣に考え始めたsustainability、すなわち維持可能な、消費した分を補填できる範囲での経済と同じである。ペリーはそういう農業を自らおこないながら、詩作でもそのことを世に訴えている実践者なのである。

2. Farming: A Hand Book (農業ハンドブック)

人間対自然という対立を捨てて、人間である自己を自然のサイクルの中に溶け込ませようとすると当然、キリスト教的な人間至上主義は消滅することになる。ペリーはMindy Weinrebによる“A Question a Day: A Written Conversation with Wendell Berry”⁵⁾のインタビューの中でウェインレブの、聖書や天地創造など宗教的信仰と文学批評との関係をただす問いに次のように答えている。すなわち、「たとえばクリスチャンがイスラム教徒、仏教徒あるいは無神論者の書いた優れた作品を評価できないとしたらそれは愚かなことだ。このように私は宗教を信じることと文学評価とはなんら深い関連はないと考えている。」と。「ただし」と彼は続ける。「言語は文学におけるそれ以外とにかかわらず宗教と非常に深く関わっている。」キリスト教を背景にしてそれに永らく培われてきた英語という言語を使って文学作品を書くからには聖書にあらわれる宗教的な言葉を使うのはごく当然のことである。そして農業をしながら日々の生活の中から生まれてくる彼の詩の言葉の中に聖書やキリスト教で使われる言葉がでてきたとしたら、それらのあらかず意味は何であるか？ 実例をあげながら考察する。

Farming: A Hand Book⁶⁾とは農業のマニュアルのような題名の詩集である。まず最初にこの詩集から“The Morning News”をとりあげ、彼が組織としての教会や国家から一線を画すことを宣言しているのを見てみた

い。詩の内容は次のようになる。「朝のニュースで、一人の男が両手を縛られ、目隠しをされて柱に括り付けられ処刑される場面を見る。組織による冷静な殺人は地獄である。蛇は人間に比べればまだ穏やかである。同種のものを殺すのは人間だけである。それで人間は太陽の下で希望をもって働くことも木陰で穏やかに休むこともできない。」そして“I will purge my mind of the airy claims / of church and state. I will serve the earth.”(私は私の心から教会や国家の空虚な要求を追い出し、大地のために奉仕しよう)と続く。眠れない一夜を過ごした私は救いを自然の中に見出す。(My heart goes on, / faithful to a mystery in a cloud. 私の心は雲の中の神秘に忠実に進んでいく)。この短い詩の中に、hell, serpent, god, church, faithful, mystery, garden と7語キリスト教に関係のある言葉が使われている。この詩に続く“In This World”や“On the Hill Late at Night”も片方に気どらぬ自然界を置きもう一方に愚かで空疎な人間界を置き、自分はその境界より少し自然界に寄ったところに身をおくことを宣言している。ペリーに先だつ自然詩人ジェファーズの“inhumanism”に近いところである。

ペリーにはMad Farmer (狂気の農民) シリーズともいえる一連の作品がある。詩集Farmingの中にはつぎの5編がある。

“The Mad Farmer Revolution”

“The Contrariness of the Mad Farmer”

“The Mad Farmer in the City”

“Prayers and Sayings of the Mad Farmer”

“The Satisfaction of the Mad Farmer”

まず最初の「狂気の農民の革命」は、異教の豊穡の神と、アダムとイブを思わせる少しコミカルな詩である。狂気の農民は神の血である聖体拝領のワインに酔いしれて教会の中庭、牧師の妻、墓地三つを耕す。すると、カボチャ、プラム、モモが豊かに実り、花が咲く。牧師の妻と狂気の農民は種をまき、収穫をした。

次の「狂気の農民の反論」は何でも他人とは反対のことを言う可笑しい農夫の話である。

When they said, “I know that my Redeemer liveth,”
I told them, “He’s dead.” And when they told me,
“God is dead,” I answered, “He goes fishing every
day in the Kentucky River. I see Him often.”

(「キリストは生きておられる」という人がいると、「いや彼は死んだ」と私はいう。しかし、「神

は死んだ」といわれれば私はこう答える。「神は毎日ケンタッキー川に釣りをしに行く。時々見かけるよ」)

4番目の「狂気の農民の祈りと言葉」の祈りは、現在ではそうではなくなってしまったが、もともとはごく自然だったことへの回帰の祈りである。たとえばIIの祈りは、「夜には私を暗闇とひとつにしてください。朝には私を光とひとつにしてください」というものである。またVIIIの祈りは、“When I rise up / let me rise up joyful / like a bird / When I fall / let me fall without regret / like a leaf. (私が起き上がる時、小鳥のように喜びに満ちて起きられるようにしてください。倒れるときは、木の葉のように悔やむことなく...)”となっている。祈りIXはスナイダーの“Prayers for the Great Family”⁷⁾を思い出させる。「種をまくとき、私の手は大地とひとつになる。種が育つように願うと私の心は光とひとつになる。作物をほりあげるとき、私の手は雨と一体になる。植物の世話をすると、私の心は空気とひとつになる。お腹を空かせ信じるとき、私の心は大地とひとつになる。果実を食べるとき、私の体は大地と一体となる。」モホーク インディアン の祈りになぞらえて唱えられるスナイダーの祈りも、ベリーのこの祈りも人間が大地に、大気に、自然に溶け込んで一体となることを願望している。

少し長い「狂気の農民の満足」では、作物を成長させる天候、十分な雨、乳で張った牛の乳房、枝もたわわに実ったモモの木、蜂の巣の中に黄金色にたまった蜂蜜、牧草の茂った牧草地、よく耕されて湿気を含んだ畑地、じゃがいも、たまねぎ、グリーンピース、レタス、ほうれんそう、キャベツ、にんじん、ラディッシュなどの収穫物、朝食前に摘んでまだ露を含んでいるラズベリー、カラント、イチゴ、ふさふさと実って粉をふいたブドウ、それらを育てるためによく働く人々の労働の後の休息がカタログのように次々と描写されている。“husbandry”という言葉があらわす、日常生活の営みを表現力豊かに描き出した作品である。詩はさらに、鹿たちの道、勢いよく流れる小川、夏の森に移り行く太陽、幹が空洞になったブナの木が100年後に自然に倒れて水流をまたぐ天然の橋となっている様子、pewee (タイランチョウ) の声、林の中にひらけた空、すべてが平和で完璧であると歌う。最後の一連には、「私がいつも予期してきた神は森の端にあらわれて、手招きをしている、私はこの世界をいとおしいと思いたい」という表現がある。

What I know of spirit astir
in the world. The god I have always expected
to appear at the woods' edge, beckoning,
I have always expected to be
A great relisher of this world, its good
Grown immortal in his mind.

この「神」は、通常大文字で始まるキリスト教の神とは違って小文字で始まっているし、現れるところは森のはずれである。

次にこの詩集の中では比較的長い詩、“Meditation in the Spring Rain” (春の雨の中の瞑想) をみてみよう。ケンタッキー州ポート ロイヤルに80年前、一人の気違い老女がいた。彼女は時々、“One Lord, one Earth, and one Cornbread”と歌っていた。彼女は狂気の発作を起こすときは大きなケージに閉じ込められたが、そうではないときは自由に町を歩き回ることができた。そんなとき町の子供たちは彼女と一緒に散歩することをゆるされた。何かが私をこの狂女にひきつけ、私の心は子供のように彼女のあとを追おうとする。それは何故かという、私の祖母の時代にすでに老女であったこのゲインズ夫人は、ここに手付かずの森があるのをみたくかもしれない。それに雨にぬれて水の音を聞きながら立っている私自身少し狂気なのかもしれないというような内容の詩であるが、この詩のはじめのところに次の1節がある。“... I meant / my words to have the heft and grace, the flight / and weight of the very hill, its life / rising ---” (私は私の言葉にこの命よみがえる丘の重さと美しさと飛翔と重量をもたせようと意図した)。しかし、地上にも地中にも豊かに水が流れるこの丘にやってくると私は私の聞きなれた言葉をしばし忘れて、神の偉大な言葉 (大文字で始まる Word) の中に解き放たれる。

III. 詩集 A Timbered Choir にみられる “Sabbath” について

詩はその誕生時から、聴衆にむかって詠んで聴かせられるものであったし、それ以来詩人は時に自分の作品の朗読会を開いてきた。Wendell Berry は The Sabbath Poems 1979-1997 と副題がついた詩集 A Timbered Choir⁸⁾ のまえがきの中で、「ここ40年来詩の朗読会がかなりの聴衆を集めるようになってきた。これは詩は印刷された形で読まれるばかりでなく口から発せられて耳で聴かれる性質ももたなければならないというこ

とを物語っている。」と書いている。ベリーはさらに続けて、「しかしながら、この詩集の中の詩は公衆の面前で声に出して読まれることを前提に生まれ書かれたものではない」という。特に注目したいのはこれらの詩作品は静寂と孤独の中で、主に戸外で書かれたものであるということである。読者も同じような状況下で、ただし、必ずしも戸外でなく、静かな部屋の中で読んではしむと。

この詩集は副題にもあるように1979年から1997年まで年を追って、各年ごとに詩にはI, II, IIIというように番号がつけられて配置されている。冒頭の1979年 - Iで作者はまず次のように書いている。“I go among trees and sit still.”（私は木々の中に入っていき静かに座る。）一日の労働のあと、林の中に来て座るとしばらくはさまざまな恐れや悩みが離れないが、そのうちそれらは去り、私の心の中に歌が生まれる。その間、陽が移り、木々が動く。この冒頭の詩の中に“sabbath”の意味がすでに解き明かされている。

OEDによれば、sabbathのもともとの意味は“The seventh day of the week (Saturday) considered as the day of religious rest enjoined on the Israelites by the fourth (or in mediaeval reckoning the third) commandment of Decalogue.”となる。すなわち、モーゼの十戒（出エジプト記第20章1 - 17節）の第4条でイスラエルの人々に命じられた一週間の第7日目（土曜日）で宗教上の休息の日のこととなる。この言葉は歴史上さまざまに使われてきたが、一般化して、一週間のうち休息あるいは礼拝のために、特別にとってある日という意味をもつようになる。1979 - IIでそれはベリーにとっては日曜日であることがわかる。いわゆる「宗教用語」に満ちたこの詩を考察する。再び日曜の朝が来て私はまたサバスを守る。しかしこのサバスは“Sabbath of the woods”（森の安息日）である。第2スタンザにある“maker”（創り手）は道路の作り手でしかも、“makers”と複数形である。そしてResurrection（復活）はカエデの葉のそれである。カエデの葉は秋になると枯れて落ち、やがて春に再生する。さらにpraise（崇拝）は光に対する賞賛という意味になる。そして第6連のMiracle and parable（神の業と寓話）は枯死の中から種子が芽生える奇跡となり死と生のたとえ話となる。しかし、最終連での用法はこれまでのそれとは異なる。

Your Sabbath, Lord, thus keeps us by
Your will, not ours. And it is fit
Our only choice should be to die

Into that rest, or out of it.

（神よ、あなたの安息日は私たちのではなくあなたの意志によってこのように私たちを支えています。私たちにできることはただ、死んであの休息にはいつていくことです。）

すべてのものがLord（主）の意のままにあり、“that rest”（死）でさえも選ぶべきものであるという。

さて、1979 - IIIの詩では“Maker”（創造主）は“all his creatures”（すべての被創造物）を創られた後“Creation's seventh sunrise”（創造の7日後の夜明け）に祝宴をあげられたとうたう。そのことがわかるのは「林の中に静かに座り、光に満たされた木々の葉を見たとき」である。1979 - VIIIでは、そのようにして創り出された森や林や、自然が5万年もかかって作り上げた豊かな土壌をほんの数年間の人間の不注意が裸の砂礫にしてしまったと現代社会の自然破壊を指摘している。

1981年には1編のみであるが、そこには世界が作られるのには人間の手は不要であるという1行がある。第5連を下に引用する。

And live as the Creation sings
In covert, two clear notes
And waits; then two clear answerings
Come from more distant throats

ここにでてくる“Creation”は“covert”（隠れ場所）からふた声呼んで、少し遠くの咽喉からふた声返ってくるとあるのでわかるように春になってなき交わす二羽の小鳥である。

もう少し“Sabbath”という言葉が使われている作品をひろってみよう。“Sabbath Poems”集であるので、この言葉がいたるところで見られるのは当然ではある。1980 - Vでは6日間の労働は静かな日曜日にサバスを迎えるためであるといっている。1983 - IVにSabbathはくりかえしでてくる。

Who makes a clearing makes a work of art,
The true world's Sabbath trees in festival
Around it. And the stepping stream, a part
Of Sabbath also, flows past, by its fall
Made musical, making the hillslope by
Its fall, and still at rest in falling, song

Rising. The field is made by hand and eye,
By daily work, by hope outreaching wrong,
And yet the Sabbath, parted, still must stay
In the dark mazes of the soil no hand
May light, the great Life, broken, makes its way
Along the stemmy footholds of the ant.
 Bewildered in our timely dwelling place,
 Where we arrive by work, we stay by grace.

2行目のサバスは森の中に耕地を切り開いたときその周囲をとりかこむ木々のそれであり、4行目では、水の流れもその一部であるという。そして9行目でもう一度サバスは毎日の労働によって整えられた畑地に残るという。また、1986-IV, 1987-I, 1989-IIでは人間の勤勉な労働が終わったところに、木々のサバスがやってきて留まるとある。

1991年の作品は多く、10編ありそのうちIXは“The Farm”と題がついていて14ページに及ぶ。そこにでてくるときサバスは“The Sabbath of the woods”である。1991年以後になると“Sabbath”という言葉はまれになり、最後は1995年のIに“a sabbath”と小文字で始まり、不定冠詞がついて使われているだけとなる。「私は呼吸し、生き、眠り、そして疲労からのサバスをとる。」と。

IV. おわりに

このようにベリーの詩にあらわれる宗教用語は、その宗教的あるいはキリスト教上の意味をあえて否定することなく使われている。ただ、作者はそれらの言葉に独自の意味を加えて使っている。自然崇拜という宗教があるとしたらそれに属する宗教用語となっている。自然と直接ふれあっている者だけが感知しうる一種のアニミズムのような信仰である。森や林や畑地が毎年繰り返す死と生のサイクルの神秘的な現象に素直に驚き、自然が人間の心身に与えてくれる恵みを享受できる者のみに与えられた特権を表現するために、生まれたときから聞きなれた聖書の言葉をベリーは使うのである。

引用文献

- 1) Jeffers, Robinson : The Collected Poetry of Robinson Jeffers. Volume Three 1939-1962. Stanford University Press. Stanford, California, 1991
- 2) Strunk, Angela : Wendell Berry. <http://www.english.eku.edu/SERVICES/KYLIT/BERRY.HTM>. 2002
- 3) Berry, Wendell : The Unsettling of America: Culture and Agriculture. Sierra Club Books. San Francisco, 1997
- 4) Brown, R. Lester : Eco-Economy. W. W. Norton. New York and London, 2001
- 5) Merchant, Paul ed. : Wendell Berry. Confluence Press. Lewiston, Idaho, 1991
- 6) Berry, Wendell : Collected Poems 1957-1982. North Point Press. New York, 1984
- 7) Snyder, Gary : No Nature: New and Selected Poems. Pantheon Books. New York and San Francisco, 1992
- 8) Berry, Wendell : A Timbered Choir : The Sabbath Poems 1979-1997. Counterpoint. Washington, D. C., 1998

Nature in English Literature: On Wendell Berry's Sabbath Poems

Kyoko Nishimura

<Abstract>

British and American nature poets deny anthropocentrism which has its basis on the words of Genesis Chapter I, because they consider the fact that human beings have been destroying nature in their exploitation of it as an atrocity. They say human race is only part of nature and has no right to ravage it. The nature poets find the sublime in not only animals and plants, but even in some nonliving things such as stones and rocks.

Wendell Berry, a farmer-poet who lives on a farm in Kentucky, uses biblical terms, such as "Sabbath", "Creation" and "mystery" in his poetry. Berry, who finds deep relationship between religion and language, does not forfeit religious connotation of those words, but adds other meanings to them. He, as his co-poets do, recognizes divinity in natural things such as hills and fields, trees and water. Thus "Sabbath" becomes "a sabbath of woods" in his poems.

Key words: Sabbath, eco-economy, farmer-poet, anthropocentrism, inhumanism